

緑爽会会報 No. 139

2015 年 8 月 25 日発行

日本山岳会 緑爽会

発行人 松本恒廣



デザイン・制作 関塚貞亨会員

～～《報告》～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

自然保護全国集会に参加して

夏原寿一

緑爽会々員の出席者： 川口章子、富澤克禮、西谷隆亘、近藤雅幸（以上 自然保護委員会委員）、田村佐喜子、松本恒廣、吉田理一、里見清子、鳥橋祥子、島田稔、尾野益大、夏原寿一（計 12 名）

今年の自然保護全国集会は 7 月 11～12 日、東京都青梅市の「かんぼの宿 青梅」で開催された。青梅駅から歩いて約 15 分。小高い丘の上に建つ「宿」は、U 字型に流れる多摩川に 3 方を囲まれ、河原でバーベキューを楽しむ家族や水に入ってはしゃぐ子供たちの姿が見下ろせる、そんな場所にあった。

参加者は約 100 名。多彩な参加者の話が聴きながら納得したり考えさせられたりの一日であった。

地元・青梅市の池田央副市長は挨拶の中で青梅の良さをアピールしながらも、吉野梅郷のプラムポックスウイルスが、梅の木としては世界で初めてこの地で確認されたこと、感染木および、その周囲の木も伐採していることの苦悩を語られた。

各支部の報告の中でも、宮城支部と福島支部の報告は、原発事故による放射能の影響の大きさと深刻が伝わる内容であった。

宮城支部では、平成 25 年から北上山地と築館丘陵で放射能測定山行を 18 回行い、そのデータをもとに広報活動を行っているとの報告があった。福島支部では三本槍岳と赤面山で放射能の測定を行っており、線量は徐々に下がってきてはいるとの報告があった。また、除染作業とは、先ず表土を 5cm 剥ぎ取り、線量が規定値に達しない場合は更に 5cm 剥ぎ取るという作業の繰り返しで、結局、土壌が剥き出しになってしまう行為であるとの説明があった。

日本自然保護協会の辻村千尋氏は「南アルプスを貫くリニア新幹線の自然破壊について」と題した講演の中で、南アルプスのようなところに孔をあけるということは、残土の問題や河川の水量低下の問題など、自然破壊につながることであって、リニアに限らずこのような行為は許されるものではないと力説された。また、長野県・大鹿村の佐藤明穂氏は、「橋梁や高圧線鉄塔などの構造物による風景の破壊で、当地の数少ない産業である観光資源が永久に失われる。残土搬出のためのダ



ンプカーが、1日1700台余りも私たちの生活道路を通る」などの深刻な状況を報告された。

自然保護委員会発足50周年を記念した講演が、松本恒廣会員と富澤克禮会員からあった。松本会員は初期の40年について、山岳会の設立趣意書に自然の大切さが謳われていることに始まり、山岳道路やロープウエー、スキー場開発の問題など、豊富な経験談に加えて当時の新聞や、自然保護の大切さを説いてこられた日本山岳会の偉大な先人の足跡を映像で示しながらお話しされた。富澤会員は、ここ10年の「大山の一石運動」や「屋久島の踏み荒らし、石積み工法による登山道」などの活動を映像で紹介しながら、自然保護を担当してこられた会員ならではの具体的な説明をされた。

帰路、河原を見下ろすと子供達はまだ遊んでいた。こんな世界がいつまでもあってほしいと思う。



松本恒廣会員



富澤克禮会員

[写真は夏原寿一会員撮影]

7月例会・恒例 暑気払い開催さる

瀬戸英隆

出席者： 梨羽時春、松本恒廣、渡部温子、川嶋新太郎、鳥橋祥子、島田稔、大山恭司、夏原寿一、深田森太郎、小泉義彦、小原茂延、瀬戸英隆

去る7月16日(木)、毎年行われている暑気払いが実施された。台風11号が通過中で雨、風ともに強く一部の路線で不通箇所も出て、出席はわずか12名(新記録か?)。

松本代表の挨拶に始まり、困ったときの助っ人、川嶋、夏原両氏の写真とスライドが発表された。

まずは、夏原氏、1974年撮影のスイスの白黒写真。ツエルマット、スネガ、シュトックホルンからのマッターホルン、グリンデルワルトからは、ユングフラウ、メンヒ、アイガーなど白黒でなければ表現できないすばらしい写真を見せていただいた。

次いで、川嶋氏。志賀高原の四十八池、南アの甲斐駒、高尾山からの富士山、東北は安達太良山、蔵王や鳥海の夕日などなど。名調子の解説を堪能した。

最後はお待ちかねビールと日本酒で心ゆくまで歓談。少人数だったが楽しい一日であった。

＊松本にお住まいの田村さんと、甲府にお住まいの里見さんは台風による中央線の不通で残念ながら欠席されました。(事務局)



川嶋新太郎会員



会場風景



夏原寿一会員
[小泉義彦会員撮影]



ワタスゲ・志賀高原 四十八池 (川嶋)



樹氷・蔵王 (川嶋)



晴れゆくメンヒ・クライネシャイデック(夏原)



マッターホルン遠望・シュトックホルン(夏原)

緑爽会の歴史と展望

関塚貞亨

緑爽会は創立から20年が経ち、創立当時の会員の多くが鬼籍に入り、また退会した人もあって創立当時の会員で元気な人は僅かに5人になってしまった。会の運営も創立当時の自然保護委員会OBによる懇親会から大きく変貌しているが、事務局を始め会員の皆さんの努力によっていまの緑爽会はクラブライフの本道に行くよい会になりつつあると思っている。

緑爽会創立のいきさつは、山岳会第17代藤平会長の末期、1995年（平成7年）5月の委員会改革により、委員の10年任期制が決められ、古い委員が辞めることになった。そのために委員OBと現役委員の懇親会として誕生したというのが通説となっているが、私は藤平会長による委員会改革の遠因は、その18年前の西堀栄三郎会長時代まで遡るものだと思う。

私の山岳会への入会は遅く1977年（昭和52年）7月、満52歳であった。第12代今西錦司会長はその年の5月で任期を終え、その警咳に接することはなかったが、後を継いだ第13代西堀会長に、中高年の新入会員が話をする機会を持てたのは奇跡のような出来事であった。

西堀会長～藤平会長による山岳会の委員会改革

入会したときの山岳会はお茶の水の「さくらビル」で借家住まいだったが、すぐにいまの四番町「サンビュウハイツ」に引っ越すことになり、狭く薄暗かった「さくらビル」にくらべて、広く明るい自前の会室と豊富な図書にひかれて足しげく通うようになった。そしてどういう経緯か定かではないが、高所登山の中核を担う青年部の神崎忠男、伊丹紹泰ら30代の若い諸兄の知遇を得たのである。そして青年部の数人と西堀会長の東京事務所を訪れることになって私もついていったのだが、会長は若手のなかに独り中高年が混じっていることにいぶかることもなく、出前の焼きそばをご馳走になりながら、会の運営、将来について懇談がもたれた。そのなかで会長の「山岳会は伝統もあるが、保守的になっていて改革しようとしても壁は厚く難しい」という主旨の発言が印象に残った。

そして西堀会長時代に新しく三つの委員会が発足し、委員の任期制などの大改革を藤平会長が断行したのだが、この改革によって、最も影響が大きかったのは図書委員会と自然保護委員会だったと思っている。当時の図書委員会は、山岳会の文化面を受け持っていて、山岳、会報、山日記などは山崎安治委員長を中心に図書委員の出版のプロ集団がよい仕事をしていた。例外は小倉厚さんの会報の担当理事就任である。任期途中で辞任した場合も後任の担当者を探すのは山崎委員長に任されていたようで、会報340号前後で、任期途中で辞任した春田理事の後任となったのが小倉厚さんである。四年の会報担当理事の任期後も会報300号から700号まで、50号ごとの目録作成を一人で引き受け作り続けた小倉厚さんの偉業は、また別の話だ（『山岳』第102年追悼欄参照）。

私が知る図書委員会の最高の仕事は、山岳会創立70周年記念として出版した『覆刻 日本の山岳名著』である。小島烏水の『日本アルプス』4巻、木暮理太郎『山の憶い出』、高頭式『日本山岳志』などの名著が初版そのまま、装丁から本文に使用した活字、紙まで忠実に復刻した。

当時の図書委員会は、朝日新聞論説委員OBの島田巽さんを顧問に、山崎委員長と中学同級だった金坂一郎、出版のプロだった近藤信行、大森久雄委員らを中心に多士済々で、それぞれの図書委員と出版社の大修館書店の協力による立派な仕事だった。いまでも『山岳』『会報』の編集に山と溪

谷社OBの人たちが中心となって出版が続いているのは有難いことである。

山岳、会報の編集は無償の奉仕だが、70周年記念の山岳名著の編集に対して出版社の大修館は図書委員の編集者の労苦に報い、報酬に相当する額を山岳会に支払った。しかし、その金は図書委員会で自由に使うことが出来なかったもので、それも無償の奉仕ということになった。付言すれば、いまの図書委員会も良い仕事を続けており、特に『山岳』の「山岳図書目録」は力作だ。

自然保護委員会の改革とその影響

1964年に松方三郎委員長と武田久吉ら凄いメンバーで発足した自然保護委員会の活動も、折からの高度経済成長時代で国土開発と観光振興の波に飲み込まれた時代が続いた。外部の人間には活動は判り難く批判もあったが、自然保護委員会は地道によい仕事をしてきている。詳しいことは『山岳』第86年、87年、89年の「自然保護の歩み(1)(2)(3)」と『日本山岳会百年史』の「日本山岳会と自然保護」、『山岳』第85年・第105年の拙著「日本山岳会と自然保護の流れ」を読んでほしい。

先に触れた西堀会長時代に新しく科学委員会が発足、自然保護、高所登山、医療、高所登山、遭難などの委員会とも連携が望まれ、また山岳気象、災害なども研究対象とされた。さらに絵画、貴重な写真、フィルムその他山岳会が所蔵する貴重な文化資産を管理する資料委員会、その下部組織のフィルム委員会が新設され、廃止された委員会もあって、四代の会長時代を経て委員会の大改革が決まったのだが、どんな改革には必ずプラスとマイナスの両面があるものだ。

例を自然保護委員会でいえば自然保護の問題は複雑で、一つの問題の解決に10年以上に亘って、根気よく活動を継続する案件が多い。委員が短期間で交代すると問題と活動などの引き継ぎが難しい。自然保護委員は山岳会の自然保護活動の歴史、知識、哲学を学び、長い経験が必要だと思っている。学識豊かな委員を短期間で交代させるのは勿体ない。



小島鳥水作「日本アルプス」表紙

[関塚会員提供]

アルパインクラブの本道を行こう

「緑爽会の歴史と展望」は会報第1号に初代代表の国見利夫さんが書いた論文の表題をそのまま頂いた。会報第1号は緑爽会発足から7年後の2002年9月に創刊され、国見さんは展望について山岳会創立の会則を引用し「山岳に隷属する森林湖沼溪流瀑布植物…に関する科学文学学術その他一切を研究すること」を第一とし次に登山に触れている。そのあたりに緑爽会の行き方であろうと述べている。卓見で私もまったく同感だ。

たまたま6月13日に有志閑談会があって中村保名誉会員と同席し、英国山岳会（略称AC）の名誉会員でもある中村さんと「ACには会員の入会を審議する委員会以外の委員会はない。1953年のエベレスト登山も隊員はACのメンバーが中心だが、登山隊はACの組織ではなく王立地理学協会など別の組織が協力、ACはあくまでクラブの本質を貫いている」などの話があってクラブのあり方に話が及び「公益法人となってから日本山岳会はクラブではなくなった」という点で意見が一致した。緑爽会はアルパインクラブの本道に行くべきだとの思いを深くした次第である。■

山小屋の管理人とは言っても、私には全く経験がない訳で、いきなりそのような立場で仕事ができるはずありません。今は見習として多岐に亘る業務を覚える段階です。これからニッコウキスゲのシーズンで、再びツアーのお客様がたくさんおみえになります。この山を乗り切ってもまだ僅か2か月。5合目というところでしょうか。頂上は見えません。

緑爽会には平野さん、吉田さんと山小屋を経営されたり、管理人をされているメンバーがおられます。私に多くを語る資格はありませんが、これまでの山での暮らしから感じたことを少しお伝えしたいと思います。

まずは、山暮らしは健康だということです。残雪の至仏山を眺めながらの屋根上布団干し。実に爽快ですが、何十枚も運んで広げるとなると、けっこう重労働です。毎日の風呂掃除、お客様が出発された部屋の布団・毛布のたたみ直しとセット、歩荷（ぼっか）さんが届けてくれた食材の収納、売店のビールなどの補充、2週間に一度ヘリで運ばれるドラム缶やプロパンボンベの運搬など、いつも大汗をかいています。こうしたエアロビクスの運動の一方で、毎日飲んでいたお酒は殆ど飲まず（禁酒なんて簡単です）、前号で粗食なんて書いてしまいましたが、原の小屋の名誉のために言うと、この意味では、私が無駄に食べていた油っこいものが比較的少なく、山ウドやフキや、行者ニンニクなど、山の恵みをたっぷりいただく賄は全て美味しく、大変な贅沢をさせていただいております、ということであると訂正いたします。そうです、腹回りの脂肪にしかない、つまりは無駄な食べ物を何と多く摂っていたことでしょう。その結果、適正体重へ真しぐら。おそらく成人病チェック項目の数値は凄く改善しているものと思います。美味しい空気と水、そして何より周りは尾瀬ヶ原とそれを取り囲む山々、という環境の中で暮らすことが健康に悪いはずがありません。

もう一点は都会での暮らしと対比させる中で環境問題・資源問題について考えさせられるということです。尾瀬だから一層そう思うのかもしれませんが。

ここではゴミを勝手に捨てることは出来ません。経費をかけてヘリで下すのです。街なら、ゴミ回収があります。空き缶・ペットボトルあちこちにポイと投げ入れられる回収ボックスがあります。山ではそんなものはありません。だから食材でも何でも必要最低限のものを徹底的に使い切り、ゴミを出さないようにするのです。食材に限らず捨てるのではなく大切に使うのです。

昔、祖父母から教えられたことではなかったかと思い出します。靴下に穴が空けば、つぎはぎして使ったものでした。何でも便利になってしまい、モノを粗末にとは言わないまでも使い捨て、ポイ捨ての世の中になってしまいました。

山で暮らしてみると、どれだけ資源を無駄に使い、環境を悪化しているのか気づかされます。その点では大変貴重な体験をさせてもらっています。

かといって、では下山してからの生活でもそのように出来るかと問われれば、はなはだ疑問ではありますが。

エゴとエコ、などと言葉が浮かびます。

話は変わりますが、お休みの日は体がムズムズして、結局山に行ってしまいます。7月2日は至仏山に登りました。前日は酷い雨で、山の鼻からの登り一方通行のルートが解禁となるのでイベントも開かれたと思います。幸いなことに私は薄日も射すほどの天気の中、至仏固有の花まで見ることが

できました。小至仏からの下りでガイドさんと立ち話をする、NHKがBSで「花の百名山」という番組を作るそうで、下見に来てるとのこと。尾瀬は今、花盛りです（7/9記）



[夏原寿一会員撮影]

～～《予告など》～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

9月山行 源次郎岳（詳細は8頁をご覧ください）

10月例会 10月15日（木） 18：30～ JAC・104号室

1956年、第1次南極観測隊に参加され、JACに於いても長く自然保護活動に携わり、後に副会長、評議員を歴任された中村純二名誉会員に、様々な経験談と共に近年の欧州の旅の思い出などをスライドをまじえてお話し頂きます。

定員 30名

連絡先：松本恒廣

11月山行 11月14日（土）～15日（日） 長澤洋会員の「ロッジ山旅」に宿泊、山行

会員消息 退会：大森久雄会員（No. 7311）「百名山」編集にかかわる裏話などを楽しく拝聴しました。

訂正とお詫び No. 138号 5頁のタイトル「お茶の水時代の人④ 加賀正太郎のこと」を「お茶の水時代の人 加賀正太郎のこと⑤」と訂正します。編集子のミスによりご迷惑をお掛けいたしました。訂正してお詫び申し上げます。

――事務局のつぶやき――

◆10月恒例の講演会の中村純二名誉会員に引き受けて頂いた。8月猛暑の一日、調布市のお宅に打ち合わせのためお邪魔した。つい先日、ご夫妻揃ってポルトガルから帰国されたばかり。91歳と86歳、お2人とも自然保護委員会の大先輩、ますますお元気。当日が楽しみです。（松本恒廣）

◆暑気払いは、全国集会から4日後なので予想はしていたものの参加者12名と、会始まって以来の記録。それにしても、川口さんは会報の他に、暑気払い、忘年会を一手に引き受けてくれていた。あの会費で、弁当から飲み物おつまみと賄われたことは、家庭菜園のお野菜はあるとしても、計算上とてもできる事ではない。大変な労力を尽くされていたことと思います。（渡部温子）

◆関塚さんが緑爽会の生い立ちから将来への展望を語ってくださった。その中で、山岳会の歴史を築いてこられた方々に畏敬の念を抱いて述べておられるのが印象的だ。編集子は、学生時代から本や雑誌でお名前を存じ上げていた方と初めてルームでお目にかかり、「この方があの…」と思いながらお話しをしたときのことが忘れられない。

前号を発行してから、その反響が大いに気になっていたが、多くの方から「読みやすい、よく出来ている」などのお褒めの言葉をいただいた。ありがたいことである。このような会報の出来た要因は先ず、松本さんによる「作りやすく、読みやすく」という方針の決定、それに先立って渡部さんが数種類の叩き台を作っていたこと、加えて、渡部さんが前号の編集後記に書いている「関塚さんの言葉に弾みがついた」。それらがこの結果を生んだと思う。人を前向きにさせる言葉、それはとても大切なことだと思う。この言葉を聞き及んでいた編集子も、パソコンで割り付けなどという“別世界”の作業をする気になったのである。

＊南川金一さんと小原茂延さんからご投稿いただいておりますが、紙幅の関係で今号には掲載できませんでした。次号に掲載いたします。(夏原寿一)

+++++

緑爽会 9 月山行 源次郎岳 1476.6m

期 日 平成 27 年 9 月 10 日(木) 雨天中止
集 合 J R 甲斐大和駅前 9 時 30 分
担 当 里見清子
コース 甲斐大和駅前発 9 時 40 分タクシー利用 登山口 10 時 10 分 → 源次郎岳頂上 11 時 30 分
(昼食)12 時 20 分発 → 林道分岐 13 時 20 分(登山道の状況により嵯峨塩鉱泉に下りますが、状況によりタクシー利用して) 天目山栖雲寺 → 竜門峡遊歩道(三日前の天気と水量により通行可能の場合歩きます) → 景德院 16 時 15 分のバス利用 → 甲斐大和駅にて解散
費 用 最寄り駅から甲斐大和駅までの往復料金
甲斐大和駅から登山口までの往復タクシー料金は一人 3.000 円弱
申し込み 9 月 2 日(水)までにお手数でもハガキ又は F A X でお願ひします。

天候により中止になりますので必ず連絡可能な電話番号をお知らせ下さい。

笹子トンネルの東西では天候が微妙に変わりますので、勝手ですが山梨の天気予報で決めさせていただきます。

メモ 緑爽会報No.138 号の予告でお知らせのありましたとおり
静かな山です。
甲斐大和駅からのバスは天目が終点です。今回は往復共にタクシーを利用します。
晴天が続けば頂上から天目まで歩き、栖雲寺拝観後竜門峡の遊歩道を歩き景德院前からバスで甲斐大和駅に向かいます。



[中村好至恵会員画]